

大学初年次教育科目におけるAL型授業の設計と効果検証

—同一科目名・複数クラス開講科目を事例として—

千葉美保子・森朋子・紺田広明・岩崎千晶（関西大学）



<キーワード> 初年次教育、授業設計、反転授業、プロジェクト学習、アカデミックスキル

背景と目的：

・背景

学部のニーズに基づいた教学IRの分析結果をもとに、学部と大学教育センターとの協働による初年次教育の専門科目へのカリキュラム改善へ（千葉・森・紺田・岩崎、2017）

→学部初年次必修科目をアクティブラーニング型授業へ移行

・目的

- ▶2年次ゼミへの円滑な移行を目的とした「専門を学ぶ意欲」を高める初年次教育としての有効性を検討
- ▶同一科目名・複数クラス開講科目におけるAL型授業の有効性を検討

授業の概要：

科目：私立K大学A学部 初年次必修科目
配当年次：1年次前期（2単位）
受講生数：約840名（1クラス25名程度×約30クラス）

科目の到達目標：

- 1) 社会の出来事や学問への関心をもつ
- 2) 学部での学習に必要な読み・書き・プレゼンのスキルを身につける
- 3) 学習に必要な種々の情報の入手や文献検索等のスキルを身につける
- 4) 大学の歴史や制度、施設について、カリキュラムを始めとする学部の様々なくみについて理解する

・2016年度からの変更点

- ・2016年度までは、合同授業（ガイダンス・講演会）をのぞき、各クラス担当教員裁量による授業運営
- ・2017年度より、大学教育センターのサポートのもと、AL型授業へ移行

・2017年度の特徴

- ・授業外学習時間を促す授業設計
- ・授業を2部構成に改訂（第1部アカデミックスキル等、第2部選択コース）
- ・形成的評価としてのルーブリックの活用（自己評価、ピア評価、TA評価）※参考資料
- ・第1部に習得型反転授業（6回中2回）、第2部に選択コース（プロジェクト学習）を導入（第7回～15回目）

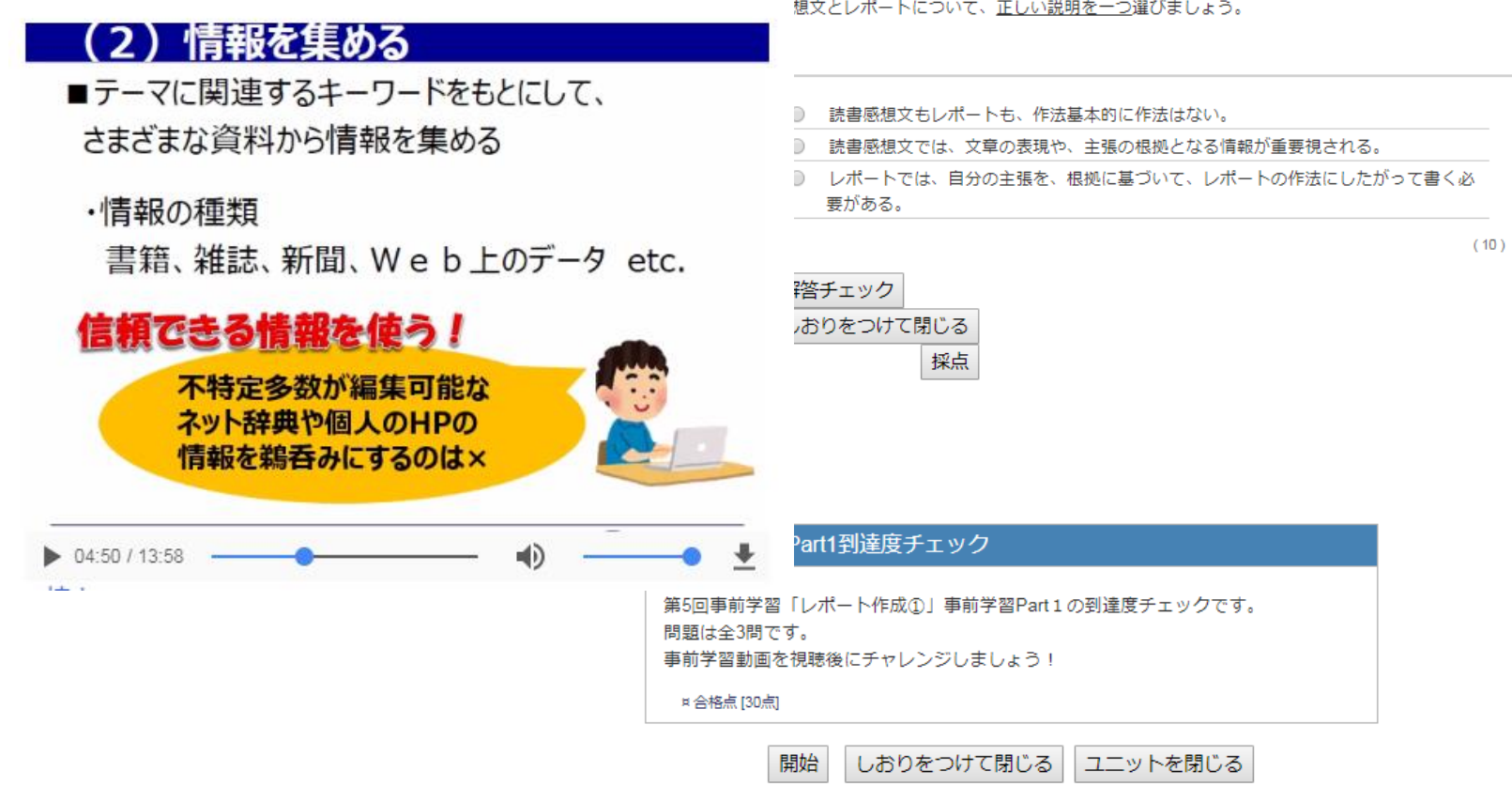
授業設計（1）：反転授業

反転授業のながれ（一例）

第2回

- ①10分の事前学習動画
- ②到達度チェック

- ①模擬授業動画を視聴しノートを作成
- ②ルーブリックによる自己評価、ピア評価を実施（①～②の工程を2回実施）



事前学習用動画の作成

- ・パワーポイントを用い、大学教育センター教員が作成
- ・配信内容：
 - 【ノートテイク】（約10分）：講義形式に応じたノートテイク、ノートテイクのポイント
 - 【レポートpart1】（約10分）：レポートと感想文の違い、文章表現
 - 【レポートpart2】（約14分）：レポート作成のプロセス
- ・授業一週間前に事前学習資料として、LMS上で配信

オンライン小テストの作成

- ・視聴後、到達度を確認するオンライン小テストを受験
- ・各テスト全3問

授業設計（2）：プロジェクト学習

プロジェクト学習の流れ

| 回数 | 講義内容 |
|------|-----------------------------|
| 第7回 | プレゼンテーションに関する基礎知識を学ぶ、グループ決定 |
| 第8回 | グループ内で課題を（プロジェクト）設定し、発表の準備 |
| 第9回 | グループ内で調査結果を共有し、発表の準備 |
| 第10回 | 中間発表（1） |
| 第11回 | 中間発表（2） |
| 第12回 | フィードバック、合同発表に向けての準備 |
| 第13回 | 合同成果発表会（1） |
| 第14回 | 合同成果発表会（2） |
| 第15回 | フィードバック&総括・振り返り |

学部上級生によるサポート
・グループ学習のファシリテーター
・授業運営支援
・発表会の司会進行／フィードバック

ティーチングガイドの開発 ※参考資料

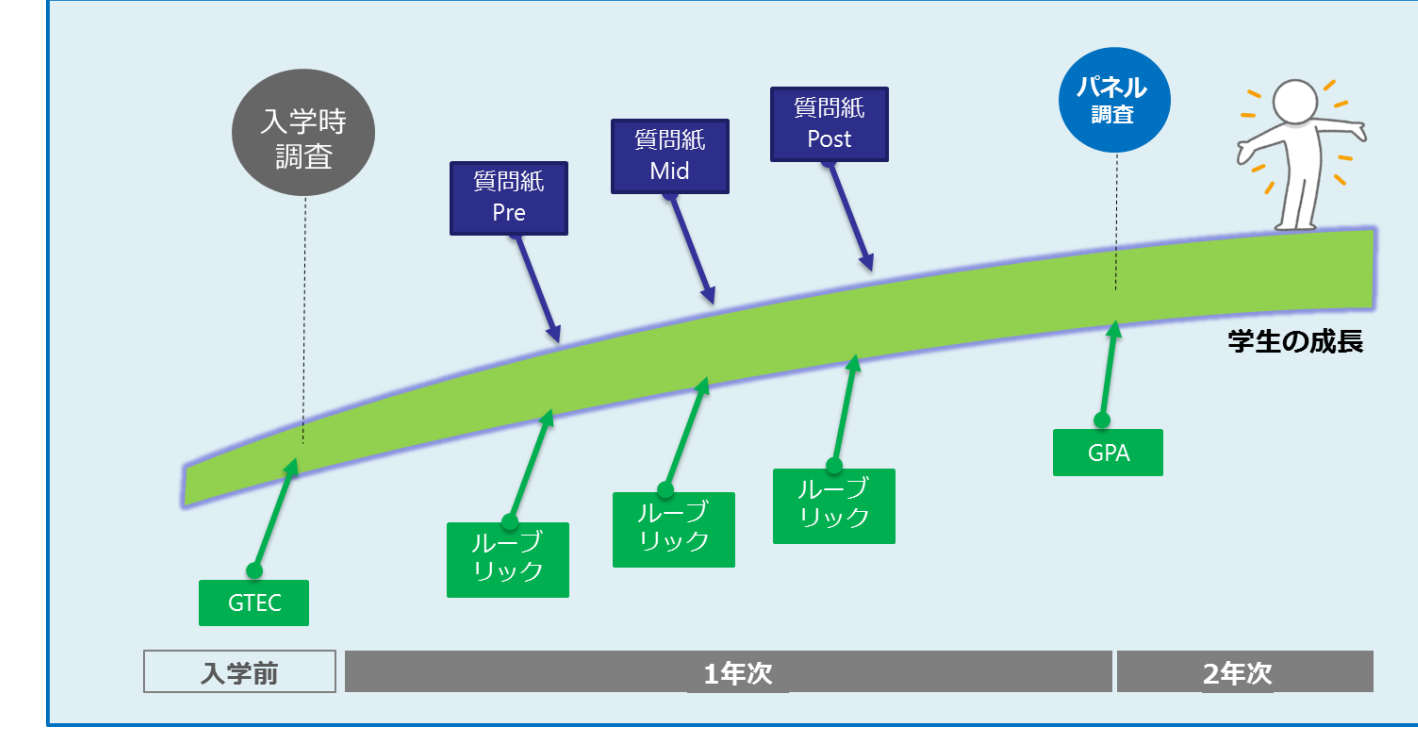
- ・構成：
 - 1) 授業の目的
 - 2) 各授業のクラスデザイン
 - 3) ルーブリック（プレゼン）、ティップス集など

プロジェクトのデザイン

- ・3～4人1グループでのプロジェクト
- ・専門に関連するテーマを各クラスで自由設定
- ・成果発表会においてルーブリックによるピア評価を実施

効果検証：

測定内容



質問紙調査の測定尺度（計17尺度）

- ・到達目標にそった10尺度、反転授業に関する項目を作成 ※資料参照
- ・アカデミックスキルのノートテイキング、レポート作成、プレゼンに関しては、ルーブリックの観点と同内容
- ・その他、7尺度（学習アプローチ尺度（河井・溝上、2012）、学習動機尺度（浅野、2002））等を測定

- ▶特徴の類似した学生集団において効果を検討
- ▶授業開始時点での学生集団を対象に、その後の変化を測定

検証結果：

検証（1）授業開始時-中間-終了時の効果測定

回答数（回答率）

- ・プレ（1回目）：767名（90.9%）
- ・ミドル（6回目）：641名（75.9%）
- ・ポスト（15回目）：593名（70.3%）

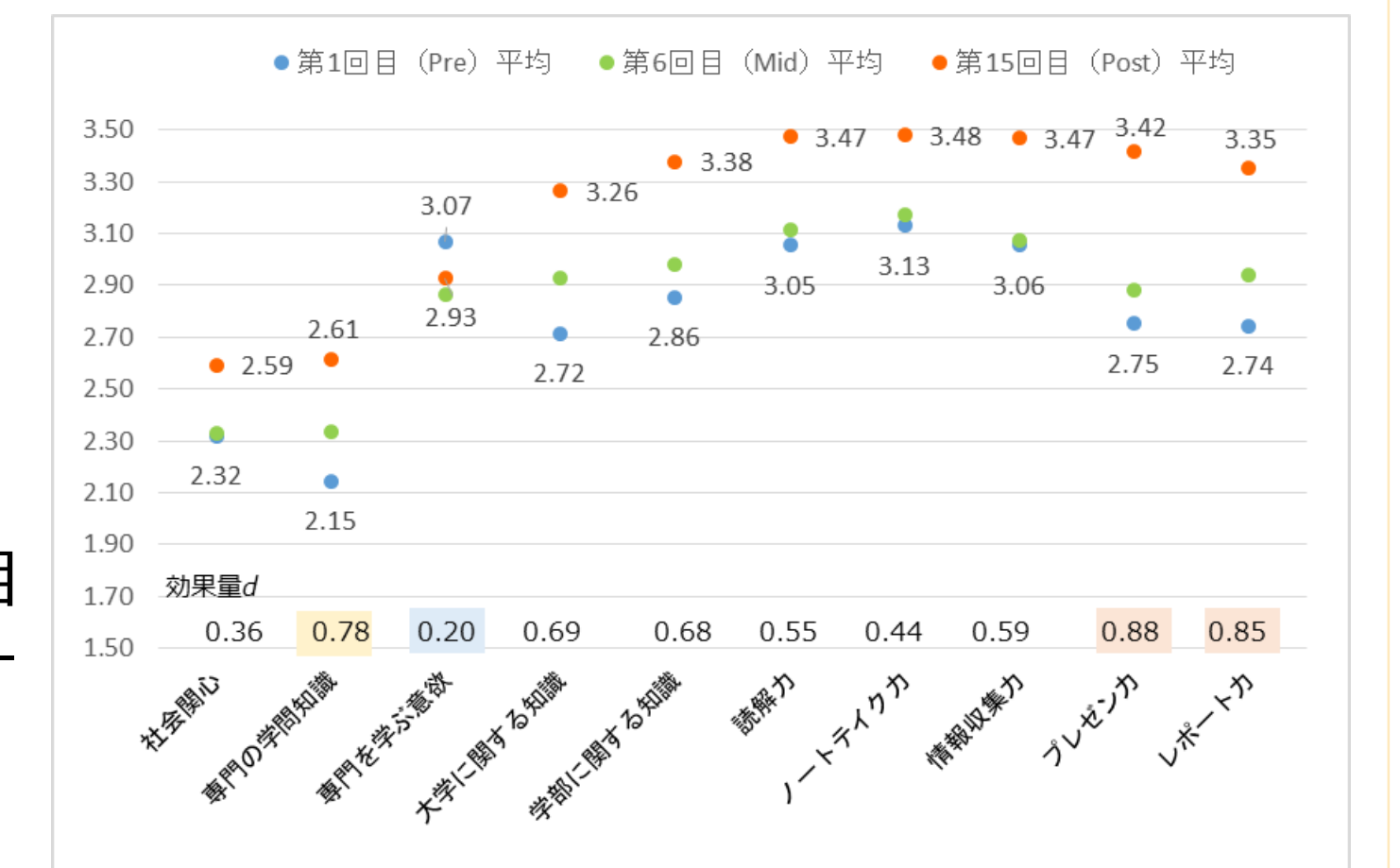


図 第1回目と第15回目の授業における各尺度の推移（N = 402～413）

- ・各到達目標の項目が上昇
※とりわけ、「専門の学問知識」（到達目標1に対応）「プレゼン力」、「レポート力」（到達目標2に対応）の上昇
※ミドル～ポストの向上が顕著

検証（2）特徴の類似した学生集団の探索

授業開始時のクラスター

- G1「低学習意欲群」（132名）…全体として最も低く、浅いアプローチの高さが特徴
- G2「学習動機低調群」（316名）…全体としてやや低く、学習動機の低さが特徴
- G3「学習動機高調群」（185名）…全体としてやや高く、学習動機も相対的に高め
- G4「他者観低調群」（59名）…全体として中程度であるが、他者観の低さが特徴
- G5「高学習意欲群」（37名）…全体として最も高い

クラスターごとの推移

- ・プレーポストでクラスター間の差が小さくなった（線の間隔が狭まる）
＝どの学生集団にも一定の効果
※とりわけクラスターG1の顕著な向上

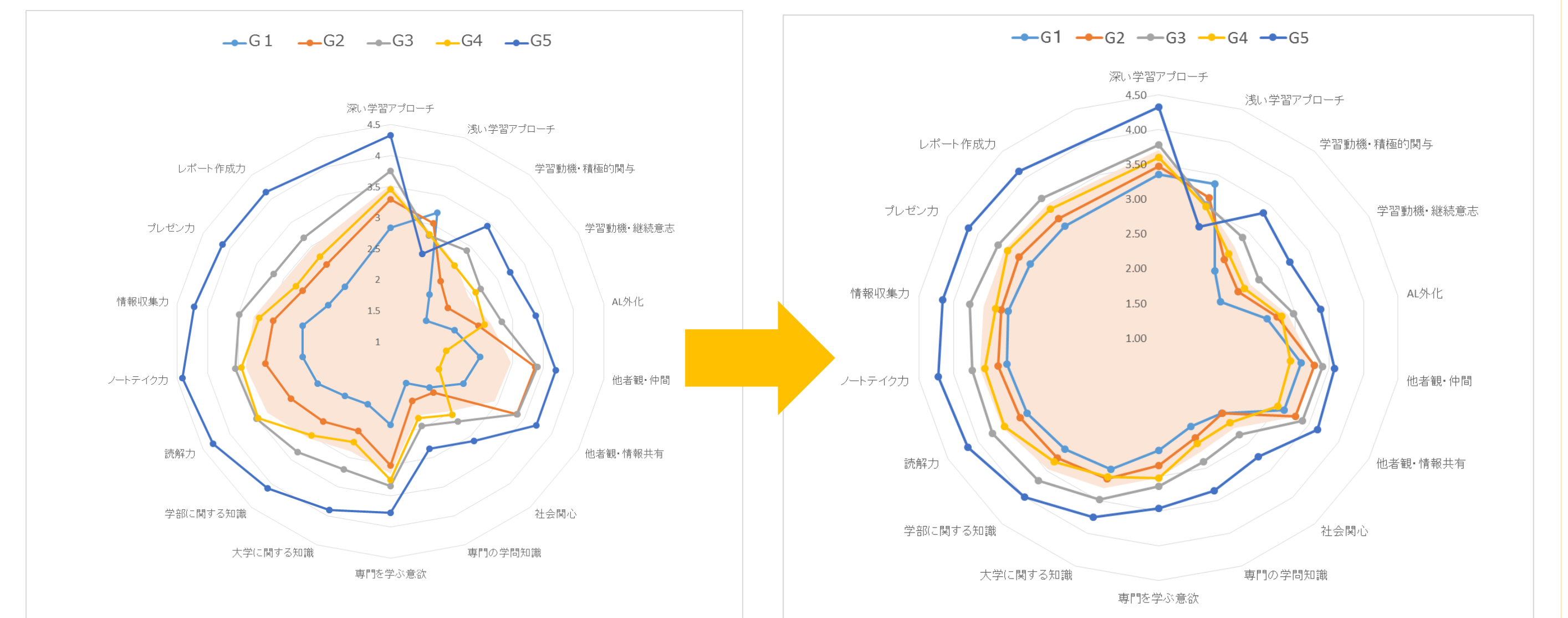


図 クラスターごとの各尺度の第1回目（左）と第15回目（右）の得点
注：薄い赤色の範囲は、各尺度における選択肢の中間以下を示す

考察と今後の課題：

考察

- ・すべての学生集団、とりわけ低学習意欲群（G1）、他者観低調群（G4）におけるアカデミックスキル、他者観の向上が顕著であり、ボトム層への効果が得られた
＝初年次教育科目としての一定の成果

- ・ミドル～ポストでのアカデミックスキル、専門の学問知識等の顕著な上昇
＝反転授業、プロジェクト学習を通じた知識の定着

今後の課題

- ・「専門を学ぶ意欲」に関しては、効果が得られなかった
＝クラスごとにとらつきの可能性→授業設計の再検討の必要性
→自由記述の分析、受講生および担当教員へのインタビュー調査の実施

参考文献

- 河井亨・溝上慎一（2012）学習を架橋するラーニング・ブリッジングについての分析—学習アプローチ、将来と日常の接続との関連に着目して—、日本教育工学会論文誌 36（3）、217-226
- 千葉美保子・森朋子・紺田広明・岩崎千晶（2017）エビデンスに基づくカリキュラム改善プロセスとデザイナー—初年次教育における専門科目を事例として—、大学教育学会第39回大会発表要旨論集、138-139.
- 溝上慎一・森朋子・紺田広明・河井亨・三保紀裕・本田周二・山田嘉徳（2016）Bifactorモデルによるアクティブラーニング（外化）尺度の開発、京都大学高等教育研究22、151-162.
- 森朋子・溝上慎一編（2017）アクティブラーニング型授業としての反転授業[理論編][実践編]、ナカニシヤ出版